

## 証言文学という形式についての一考察 —アレクシエーヴィチ『セカンドハンドの時代』読解—

石丸 敦子

### A Consideration on the Form of Testimonial Literature —Alexievich "Secondhand Time" Reading Comprehension—

ISHIMARU Atsuko

#### Abstract

In literature, contrary to the common belief that a theme to be claimed precedes, there are cases where "form" brings "content".

From the testimonial literatures of Svetlana Alexievich, the "Secondhand Time" is used as a text to examine the specificity of the latter type of literature. In this literature of testimony, people who were not able to meet in time or in space are gathered in one place in the form of testimony. The aggregate creates new content and meaning beyond what each testimony already had inside. Historical recognition starts to be created here such as how Soviet Union was like, and where Russia should settle itself which seems to have lost sight of where it should be after the Soviet collapse. It becomes a place where positive act of digging up the utopia image held by people in testimony and memory starts to get the answer.

However, what we see there is not only the newly acquired "contents" but also the "supremacy" that Bataille says that human beings are continually craving for nature.



## 目次

- I. はじめに
- II. 文学というカテゴリー
  - II-1. 文学とは何か
  - II-2. 著者アレクシエーヴィチについて
  - II-3. 形式の選択
  - II-4. 文学の範疇に含めることができるか
  - II-5. 歴史とのかかわり
- III. 『セカンドハンドの時代』について
  - III-1. 『セカンドハンドの時代』の構成
  - III-2. 『セカンドハンドの時代』の最も特異な点
  - III-3. 共犯者
  - III-4. 8月クーデター
  - III-5. 証言の言葉からなぜ像を結ぶことができるのか
- IV. 「至高性」について
- V. おわりに

## I. はじめに

作家がある意図をもって、通常考えられているフィクションとしての文学形式とはいささか異なった「証言文学」という特有の形式を選び取ったとしよう。そのとき、その選択によって作家にはどんなことが起こるのか。その点を、ノーベル賞作家アレクシエーヴィチの新作『セカンドハンドの時代』<sup>1</sup>を手掛かりとして考えてみることにしたい。

通常は語るべき内容が先行して存在し、そこにおのずと形式がついてくると考えるものだ。しかし、初めに形式があり、内容はそこから生み出される場合もある。そのように文学における形式と内容の相関関係について考えることは、そもそも「文学とは何か」という問いにも関係している。おそらく、文学のフォルムをめぐる議論され続けてきている難題のひとつであると言っていいだろう。本稿では、形式が内容を規定し、それを導き出すという作用について、証言文学という様式をめぐる考察してみよう。

「証言文学」という形式においては、それもアレクシエーヴィチの語りの形式においては、まずは証言の一つ一つに内在する力が可視化されるという点に特徴がある。証言が元（げん）として文学という集合の中に呼び寄せられることによって、ただの寄せ集め、羅列の状態を超えて、総和以上の内容を獲得しているようにも見える。そのメカニズムについて熟考して考えることが必要である。「証言文学」というスタイルにお

いて、具体的なテキストに即して、証言の総和を超えてたどのような新たな内容が獲得されているだろうか。結論を急いで述べるならば、アレクシエーヴィチ文学においては、「感情の歴史」<sup>2</sup>、「歴史哲学に向けて開かれた空間」<sup>3</sup>、そして最も予期しなかった内容として「至高性」という人間の究極の願望ともいえるべき瞬間の美が、出現している。そのことを本稿は確認しようと考えている。

テキストに用いる『セカンドハンドの時代』には、「大きな歴史」には登場しない市井の人びとが、消滅したソ連という国をどのように生きて、どのように内面化していたのか、その後、ソ連という社会的アイデンティティを失った世界に放り出されてしまった人々がどのように生をつないでいこうとしているのかが、彼ら自身の声で語られている。証言集を読むつもりでページを繰ると思いがけないことに個々の小さな語りが集合的記憶としての生きられた歴史の像を構築し始める。すべてが異なる顔つきと表情、明確な輪郭を持った多くの顔が見えるなか、あたかもそこに水晶宮のような壮大な建造物がそびえたっている、そのようなイメージである。総じてアレクシエーヴィチについての研究は多くはないのだが、緒についたばかりの研究成果の一つ、クリュリョフの論文<sup>4</sup>は、やはり形式と構造に着目して、「とてつもなく大きな絵が描き出された」と表現している。もとより苦悩に満ちた証言は一つ一つがすでに豊かであるが、集約されてその総体は過剰なまでの豊かさをたたえ始める。ソ連邦の歴史のあ

る断面に本来の歴史主体である市井の人々が、証言の形で共時的に存在する空間を開き、「大きな歴史」が前提としてきた価値の転倒をひき起こす。証言が呼応しあって相乗効果をもたらし、作品に単なる総和以上の大きさを持つ総体性を獲得させる。しかし、また一方、証言の一つ一つは読み手の感性に開かれたままであり、個々の解釈の前にさらされた状態である。個性的な証言は集約されることを拒み、個々が大事に扱われるよう存在を主張し続ける。つまり、一方では壮大なイメージが形成されるが、一方ではすべての証言が万人の解釈に向けて開かれたままなのである。その開かれた証言に再び立ち返って検証し続ける営みのなかに、歴史哲学が展開される瞬間が到来するのではないか、というのが論者の抱いている仮説である。

## Ⅱ. 文学というカテゴリー

### Ⅱ-1. 文学とは何か

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの「ユートピア五部作」は、いずれもカタストロフの苛酷な記憶を刻印されたロシア人の声を掬いあげた仕事である。まずは、証言集、ドキュメンタリー、オーラルヒストリーとして受容されるものであろう。そのため、2015年にアレクシエーヴィチの作品群がノーベル文学賞を受賞したことについて、これらがいかに優れているとはいえ、文学の範疇に収められうるかという疑義がいまだに提示されている。現代ロシアの作家で論客のトルスターヤは、以下のような辛辣な批判を浴びせている。

このような決定をしたことで、ノーベル委員会  
は、テープから起こしたままの生の聞き書き、編集不足の魅力に乏しいテキストが目下のところ重要視されているのだと明言したことになる。記者としての視線からとらえられた、ありふれた事柄、涙腺を刺激する話、重要な出来事ではあるがそれを素のまま書き写した物語、これらがまさに現実

的で現代的だというのである。ノーベル委員会はこれに報いることに決めたわけだが、そのことはとりもなおさずノーベル委員会の文化レベルを物語ってしまったのだ<sup>3</sup>。

こうした発言が、文学の形式に関するある予断をなぞっているにすぎないことは直観的に分かるだろう。前提となる「文学とは何か」という問題について、長らく、そして現在でも論争中であり、大多数に受け入れられる確定した定義はない。文学はフィクションであるというのが大方の通念である。一方、すべての書かれたものは言葉による構築物だという見解<sup>4</sup>に従えば、そもそもすべての書かれたものはフィクションであり、小説ばかりか、メモ書きに始まり新聞や歴史叙述に至るまで文学であるとみなすことも可能である。

テリー・イーグルトンは、この両極に対して、「非実用的に読むのだと決めてかかれば、そう読めないものなど存在しない」し、裏返せば「どのような著述も「詩的に」読める」<sup>5</sup>とした。「いかなる客観的な陳述も、価値判断であることから逃れることはできない」<sup>6</sup>として、「わたしたちの客観的で記述的な陳述すべては、価値の諸カテゴリーの、しばしば不可視の網の目のなかで生起し機能している。」<sup>7</sup>と結論づけている。そして、文学は、客観的に存在するものではなく、価値判断が構成していて、しかも歴史的变化を受けるものであるとする。この文学の網の目としての価値判断は社会的イデオロギーと密接に関係しているが、そのイデオロギーとは、ある特定の社会集団がほかの社会集団に対し権力を行使し、権力を維持していくのに役立つもろもろの前提を指している<sup>8</sup>。このようにして、文学を、特定の社会構造と結びつく世界認識のありようと規定したのである。

佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』は、日本の50年代の文学に関する論評集であるが、そこに聞き書きをすることについての秀逸な見解が述べられている。森崎和江や石牟礼道子の聞き書きの作品を取り上げ、「ともに重要な文学作品であることは間違いないが、しかし現在の「文学」の体制は、こうした作品に

代表される「聞き書き」の言葉を必ずしもうまく位置付け得ていない」とする。

…一方の実証主義、他方の文学主義がそれぞれ逆方向から「聞き書き」の言葉の響きを引き裂いてしまい、それに固有の場所を与えることができないのだ。しかし、このことを逆に捉えるなら、聞き書きの言葉は既存ジャンルの分類法と感性的なものの安定した布置のただ中に穿たれた空虚なのである。表象システムの断層を指し示す聞き書きや生活記録は、それらに適切な場所を与えることのできない文学概念のリミットを指し示している。ゆえに、もしそれを「文学」の内に数え入れるなら、その時「文学」は既存のそれとは異なる何かに代わっているだろう。2015年のノーベル文学賞は、小さき人々の声を集めた「聞き書」の作家、アレクシエーヴィチに送られた。「文学」にとってこの事件が持つ意味は限りなく大きい<sup>9</sup>。

イーグルトンと佐藤を架橋する文学の領域確定の可変性の概念を論者も共有し、それらに依拠して、アレクシエーヴィチの作品を文学、しかも他者の生の声から成り立っている証言文学と措定して論を進めてみよう。

## Ⅱ-2. 著者アレクシエーヴィチについて

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチは、1948年、ウクライナに生まれ、父の国ベラルーシに移住する。国立ベラルーシ大学ジャーナリズム学部を卒業後、ジャーナリストになった。その後、大祖国戦争、アフガン戦争、チェルノブイリ原発事故、そしてソ連崩壊というソ連、ロシアにおけるカタストロフとも言うべき出来事にかかわった人々の証言をあつめて本にまとめ、その仕事によって2015年度ノーベル文学賞を受賞した。受賞理由は、「我々の時代における苦難と勇気の記念碑といえる多声的な叙述に対して」である。アレクシエーヴィチ自身は、スターリンの大粛清や大

祖国戦争の直接の体験者ではないが、それらを家族の記憶として分かち持ち、共同体の女たちの言葉として身体化してきたという経歴の持ち主である。以後、彼女はつねに民衆の側に身を置き、著作活動を通して静かに反権力、反体制の姿勢を貫いている。そのため、ロシア現政権からは疎まれ、ベラルーシでも同じ事情で出国を余儀なくされ、ヨーロッパに仮住まいした時期さえあった。

緒言に当たる「共犯者の覚え書」によれば、著者自身ソ連体制の申し子で共産主義の建設を夢見る他の少女たちと何ら変わりはない。しかし一方で、村の女たちの語りを何より興味深いものとして食い入るように聞いて育ち、長じてジャーナリストとなり、ソ連体制あるいはそれを生み出した近代というものを批判的に眺める視線を培っていったと思われる。

## Ⅱ-3. 形式の選択

アレクシエーヴィチは、社会主義社会に生きた人びと、その社会の犠牲になった人々を描くためにどのような手段が最適であるのかを長らく模索し続けた。

第二次世界大戦の後、震撼させられたテオドル・アドルノは「オシフィエンチム以後、詩を書くことは野蛮である」と書きました。私の師であるアレシ・アダモヴィチもまた（……）、20世紀の悪夢について小説を書くことは冒涇だと考えていました。作り事はできない、真実をあるがままに提供するしかない、「超文学」が必要だ、証人が自ら語らなければならない、と。ニーチェの言葉を思い出してもいいかもしれません。どんな芸術も現実には耐えることはできない、現実を「持ち上げる」ことはできないと述べています<sup>10</sup>。

バフチンは、「芸術の形式とは、すでに出来上がった発見済みのものに形を与えるものではなく、まさにそれがあって初めて内容を発見し、目の当たりにすることが可能になるようなもの」<sup>11</sup>だと言う。この認識を



援用するなら、アレクシエーヴィチの手法によって、形式がその目的に沿った高度にまとまりをもつ内容をもたらすことを説明できるかもしれない。

著者の、社会主義国家のありようを身体化していながら、それをクリティカルに眺めえる視線は、ロシア的家父長制の根強く残る社会の中から漏れ聞こえる、女たちをはじめとするマイノリティのかすかな呪詛の声を鋭くとらえることを可能にしたのである。大きな物語が覆い隠そうとしてきた、体制の下敷きになった人々の生の実像を明らかにし、人びとに提出したいというパトスだけが先行して存在した。師アダモーフ・ヴィチらがすでに描きだしていた証言文学が大きな実りをもたらすことを目の当たりにしたアレクシエーヴィチが、取材を始めた時点では「内容」はほとんど存在していなかったはずである。実証主義的な歴史家であれ、歴史叙述をナラティブと捉える歴史家であれ、共通してその仕事の大半が史資料の収集であり、その時点では歴史はまだないことと似ている。

この唯一無二の形式を発見し選び取った時点で、文学的創作活動は始まっているといえることができるであろう。時間的、空間的に異なる存在の証言者たちが一か所に集められる場の形成自体が、壮大なフィクションだとも言える。さらに、集められた証言は、著者の哲学や感性により選択され、切り取られ、配置が決定される。通常はこれに加工の伴うことも多い。あまりにも洗練され、的確な言葉がえらびとられ、時にユーモアに富んだ証言の数々を見て、これは著者の創作した証言に違いない、ごく普通の人の語りとは思えないと、しばしば問われるというが、アレクシエーヴィチ自身は文言を書き換えることはないと言っている。そのうえで、作品をまとめる際の手際が、証言を連結する地の文と共に作者の思想を反映することになるのである。証言は元来、嘘や矛盾、忘却、記憶違い、記憶の書き換えなどを不可避免的に含んでいるものだが、むしろそのような変形作用を引き起こす力学を読解しようとする時、場合によっては、思いがけない歴史認識が獲得される可能性すら開けてくるのである。ここで留意すべきなのは、本書で提示された証言という史資

料は、当然のことながら著者の抱く認識に従って選択されているから、その選択にかたよりが出ることは免れ得ないということである。しかし、そのかたよりは負の要因とはならないと考えられる。歴史を極限まで検証しようという際限のない営みの中では、そのかたよりさえ、組上に載せざるを得ないであろうからである。

## Ⅱ-4. 文学の範疇に含めることができるか

証言からなる著作群がなかなか文学と認められない原因のひとつは、その内容である証言が著者の創作ではない生身の人間の声にすぎないと考えられていることにある。しかし、これらの証言は、アレクシエーヴィチが掘り起こし、蘇らせ、気遣い、絶えず挑発することで、即自的な意識にすぎなかったものが自己還帰の運動を展開するまでに啓発されたのである。まさにアレクシエーヴィチが生み出した主人公たちであると言える。無から有が生み出されたと言っても過言ではないだろう。

すでに述べたことであるが、これらのファクターは一堂に会するという文学のみが提供できる対話と共鳴の場を得ることで、全体を上回る総体性を獲得していく。まず、個々の証言はそれ自体が、その場で口をついて出たものであれ、長らく意識の上でこころがされてきたものであれ、過酷な環境の中で苦悩を経て抽出されたものであるために、証言者の精錬された思想の外化とみなすことができる。その時、証言は説明的な文言を排して極限まで切り詰められた「詩の言葉」で語られることになる。「詩の言葉」は、その簡潔さゆえに逆説的にも複雑で広大な世界を内包しうるのである。亡命詩人のプロツキイはこう言っている。

詩を書き始めるとき、詩人は普通、それがどう終わるか知りません。そして時には、書き上げられたものを見て非常に驚くことになります。というのも、しばしば自分の予想よりもいい出来栄になり、しばしば自分の期待よりも遠くに思考が

行ってしまうからです。これこそまさに、言語の未来がその現在に介入してくる瞬間に他なりません<sup>12</sup>。

超越論的な意味での啓示が降りてきて、作品が芸術となる瞬間がとらえられているのだと思われるが、まさに同じことがアレクシエーヴィチの作品にも起こっていると思われる。

前述のトルスターヤの議論は、すでに幾重にも反駁されているのではないだろうか。

## Ⅱ－5. 歴史とのかかわり

哲学の分野で起こった20世紀の言語論的転回が歴史学の分野にも波及し、歴史叙述はナラティブの形をとらざるをえないという言説が一定の地歩を固めつつある。そのことが開いた空間では、正史が重視した科学的に検証可能な史資料を唯一無二のものとする態度は退けられることになる。そして、確たる概念を構築するための立脚点とするにはあまりにも曖昧で、心理学や精神病理学などと隣り合わせにいる極めてゆらぎの大きい、信ぴょう性の低いものと周縁化されてきた、記憶、ノスタルジア、証言、思い出、メランコリー、感情、ホームシックといったものに焦点があてられるようになった。それらは、過去を掘り起こす際にはモノとして現存する資料よりはるかに潜勢力を持っていると考えられるようになったのだ。また、このような空間が開かれたもう一つの重要な事情について、ホワイトは、ある講演の中で「ポストモダニストによる過去の表象は、「伝統的な科学的歴史」への不満、すなわち、ホロコースト、核兵器、新種の病気（エイズ）、グローバル化など、20世紀の「極端」な出来事に関する歴史叙述に対する不満から生まれていることが背景にあるため、いわば「対抗的な歴史叙述」とでもいうべき性質を備えている」<sup>13</sup>と述べている。ホロコースト、スターリンの大粛清、総力戦、原爆投下、水俣病をはじめとする公害などは、近代が加速して疾走した20世紀ならではの現象であるが、「これらは何であっ

たのか」、「これらの企て、抑圧を実行に移した力学はどのようなものであったのか」と問いを立てても本質的なところは未だに表象不可能である。表象不可能であるために、認証することも不可能なままである。

本稿は、本書が芸術の一分野としての文学に属し、文学そのものであることを強調してきた。その上で、上述の議論にのっとると、『セカンドハンド』は明らかに歴史叙述でもある。本文中で地の文として時々登場するアレクシエーヴィチのたたずまいは穏やかなものであるが、本書の実質は20世紀の巨大なカストロフを受けて、その認証不可能性に挑む「対抗的な歴史叙述」だということができる。

しかし、著者はやはり穏やかに、この本の趣旨を、

私は、「家庭の」……「内面の」社会主義の歴史をほんの少しずつ、ちよつとずつ、拾い集めようとしながら書いている。人の心のなかで社会主義がどう生きていたかを<sup>14</sup>。

としている。「歴史家の目ではなく、作家の目で世界をながめて」<sup>15</sup>書かれた、歴史学のものではない歴史叙述であることが目されていたのである。だから、「裁くのは時代にまかせましょう」<sup>16</sup>として、歴史家の歴史叙述には欠かせない解釈が施されることはたえてないのである。

アレクシエーヴィチが、証言文学という形式を選び取ったのは、直截的にはアダモフ・ヴィチらの影響によるが、言語論的転回と20世紀のカストロフ以降、ある意味それは必然だったということができよう。実際、ソ連に特有な事象や生活についての証言文学やそれに準ずるものは、流布しているものだけでも相当数あると思われる。『セカンドハンド』は、崩壊という出来事が逆にソ連を照らし出そうとして21世紀に次々に出版された証言文学の系譜に収められるかもしれない。しかし、後述する本書の特殊な様式のために、一人系譜をはずれ、特異な地位を占めてしまったとも言えるだろう。

### Ⅲ. 『セカンドハンドの時代』について

#### Ⅲ-1. 『セカンドハンドの時代』の構成

本書はその大部分が、ソ連崩壊後にロシアの市井の人びとに作者が直接インタビューして集めた証言からなっている。本文は大きく二部構成になっている。

第一部（1991～2001）は、ペレストロイカから、崩壊を経て、プーチン大統領時代のごく初期までで、人びとが旧ソ連の心性をまだ色濃く宿していたように見える時代である。証言者は、ソ連の社会主義を直接体験し深く内面化していた人々である。第二部（2002～2012）は、社会主義を他者の記憶として知っているが、ソ連の体験を持たない世代が登場し始めた時代であり、プーチンに牽引されたロシアが大国ナショナリズムを掻きたて、スターリン時代の再来のように見える時代である。

証言者は都市部に偏るものの、旧ソ連のほぼ全領域に遍在している。これまでの作品では、証言者一人につき長期にわたって聞き取りするスタイルで、一作につき500から700の証言が集められるが、実際に用いられるのは200ほどであった。本作で証言の扱いにおける最も大きな変更点は、路上や会合の場で予約なしに行われた一人当たりの言葉が短いインタビューが多数収録されていることである。そのため、収められている証言の総数は460以上に上る。その性別は、男性約310、女性約150と大きく偏っているが、アポイントメントを取って、長期にわたってインタビューを行い、一人に割かれるページ数の多い証言は、4:1の割合で、女性が圧倒的に多い。そのジェンダー的な偏向の意味は稿を改めて論じることにした。

最初の「共犯者の覚え書」は著者による前書きにあたるが、そこで自らの中心思想を語るのではなく、アレクシエーヴィチ自身の内部に埋め込まれた集合的記憶を、体験した時のままの状態を外化させている。つまり、作者が一人目の証言者として登場するのである。ただし、実際には平易な表現ながら選り抜かれた「詩の言葉」からは、彼女の思想や歴史認識が浮き上

がらずにはおかない。

最後の「庶民のコメント」はあとがきにあたるものだが、そこにあるのは、地方のある村の老境に入りつつある一人の農婦の証言だけである。本書は、少なくとも証言者が「ソヴィエト人を理解できるのはソヴィエト人だけです」という認識を持つ中で、ロシアという局所で起こった事象について書かれているが、一方では、やはり少なくとも証言者が「人間はいつの時代も変わらない」としている。ソヴィエトもロシアも頭上を通り過ぎていくだけの田舎の日常を生きること、ある種の高潔さを身にまとった農婦が人間一般の普遍的な姿として最後を締めくくる。しかも、最後の言葉は「花束を作ってあげようか……」と、句点なしにこの大作が終了し、余韻というより読み手にある種の落ち着いたなさを与えたままになるのである。それは取材が終わってもロシアの物語、人間の物語は続くことを想起させ、ここから思考が始まると暗示されているようでもある。

#### Ⅲ-2. 『セカンドハンドの時代』の最も特異な点

構成において、『セカンドハンド』を他の多くの証言文学から分かつ最大の要因は、地の文が極限まで切り詰められているという一点にある。一般的に証言文学の地の文は、作品成立の背景の歴史や事情から始まり、個々の証言者の人物紹介や証言の背景やその持つ意味まで、説明と解説が施される。それらなしには十全な理解は得られないからである。あるいは証言を理論構築のツールとして用いあするが、もはや地の文とは言えない作者の思想や考えを披歴するための証言以外の文章に重心が置かれる場合もある。

ユートピア五部作では、地の文が伝えるのは、インタビューしたときの街の様子や、証言者のしぐさや証言者と作者の接触のようすなどである。証言内容に立ち入ることはほとんどない。何度も通ううちに証言者が、クッキーを焼いて待っていたとか、お手製のジャムでもてなしてくれたとか、ついには食事を用意して

あるから食べて行ってくれと言われたことや、行ってしまうときは娘のように三度振り返って別れを惜しんでおくれと言われたことなど、証言者との交流のようすが挿入される。これは証言の一つ一つを単に書かれたものとして読ませるのではなく、読み手を取材の現場に引きずり込み、その場で聞いているかのように証言を体験させようとしているのだと考えられる。そしてそれ以上に重要なことは、証言と証言者の間に信頼関係が成立しているさまが読み取れることである。タジク人の出稼ぎ労働者のコミュニティでは、アレクシエーヴィチは「ねえさん」と親しく呼びかけられる。前出の佐藤は、証言者と作者の間に信頼関係が成り立つかどうか、証言文学の成否を決めるとまで言っている。

地の文を極端に削減することで、作品の主要な語りをほとんど証言に任せてしまった。証言同士の格闘と共鳴から生み出されるものだけを提示して作品の主張となしてしまったのである。単なる寄せ集めで主旨が果たせる証言集ではなく、確固たる証言文学がこれほど全面的に証言の活躍に負っている例を、管見にしてほかには知らない。この背後には、アレクシエーヴィチが証言を、文言は変えないとしても、光輝を帯びるように彫塑し、格闘と共鳴が起きるように緻密に気遣って配置したことが、ほとんど証言だけからなる大胆な作品を成立させたのである。「構想の大きさと力のこもった出来栄えという点で傑出」<sup>17</sup>した作品が生み出されたのである。

### Ⅲ－3. 共犯者

「社会主義を生きた人びとの感情の歴史」を書くという大きな課題は、取材と執筆の過程で新たに重要な問題意識を掘り起こすことになった。

前四作の、『戦争は女の顔をしていない』(1984)<sup>18</sup>、『ボタン穴から見た戦争』(1985)<sup>19</sup>、『アフガン帰還兵の証言』(1991)<sup>20</sup>、『チェルノブイリの祈り』(1997)<sup>21</sup>で扱ったものは、肯定的な歴史の裏に隠された歴史、人びとがまだその国家で生活しているにもかかわらず

国家が忘却と風化を望んでいた歴史であり、その出来事にかかわった人々を除き、国民には内幕が伏せられてきた歴史であった。上記四冊は、「まるまる一つの世界が知られないままに隠されてきた」<sup>22</sup>、その世界を埋もれたままにせず、後代に伝えようとする試みであったといえるだろう。一方、『セカンドハンド』は、史上初の社会主義国家の崩壊を受けて執筆されたが、エレナ・ユーリエブナの証言にあるように、「社会主義のことをもう話さなくちゃいけないんですって？だれに？しかも全員が目撃者だというのに」<sup>23</sup>と、取材の環境が全く変わってしまったために、その問題意識は明らかに別の段階にシフトせざるを得なくなっている。消失を恐れた記憶の保管の行為から、新しく未経験なロシアがソ連の未来として人々に渴望された「あるべき場所」<sup>24</sup>にいない状況を写し取ることに重心が移されている。

実は、本書の前に、「ユートピア五部作」には含まれなかった『死に魅入られた人びと』(1998)<sup>25</sup>が出版されている。そのうちのいくつかの証言は、『セカンドハンドの時代』に移し替えられ、新たに息を吹きこまれた。崩壊からその1998年という出版年の間は、自由と希望に湧きだっていた時期はごく短く、資本主義経済への移行の困難さからお金の価値が急落し、赤貧洗うがごとき人々が再び権威主義的に大国ソ連の誇りを取り戻すことを渴望した時代である。この時ロシアでは自殺者が急増し、個人的現象とされていた自殺が社会的現象にまでなっていたのである。アレクシエーヴィチはその前書きで、生きている神話は解剖することができないが、今や分析の時がやってきた、大いなるうその時代は消え去ろうとしているが、この妖怪の息の根を絶たなければ、自分たちがそれに殺られてしまう<sup>26</sup>、としている。このときでも、一人の人間の中に犠牲者と迫害者がいることを見ていなかったわけではないが、悪の責任があるのは、やはりソ連の社会主義だったのであり、それを持ち上げていた権力者たちであったと、アレクシエーヴィチはこの段階までは理解していたのである。

しかし、その5年後に出版された本書では、見開き



に、犠牲者と迫害者は兄弟関係、悪の勝利に責任があるのはむしろ善に仕える人々、といった内容の二つの象徴的な箴言が載せられている。続く本文は、「共犯者の覚え書き」という小見出しの前書きで始まる。一番目の証言者として、この本の一人目の主人公として作者自身が登場しているのであるが、ここで自身もソヴィエトという国家を日常的に批判することなく受容し、その存続に手を貸した共犯者であり、犠牲者でもあったが迫害者でもあったと、冒頭で立場を明確にした。ここで、この前書きはほかの作品でもそうだが、ほぼ本文の形ができて以降に書かれたものであることを確認しておく必要がある。前書きは、本稿が問題とする形式が導いた内容の一つだからである。

自分も迫害者の側にいたかもしれないという反省的思考は、証言の中でも何度か問い返される。そのうちの一つは、罪の可能性が具体的である。

スターリンをスターリンたらしめていたのはだれなのか。…裁かれなくてはならないのは、銃殺していた人、拷問していた人だけか、それとも密告の手紙を書いた人、逮捕された人を乗せて運んでいた人、拷問の後の床を洗い流していた掃除婦、政治犯を乗せた貨物列車をシベリアに発車させていた駅長、収容所の警備兵たちが来ていた短い毛皮外套を縫っていた仕立屋たち、警備兵の歯を治療し、心電図をとり、彼らが一層勤務に励めるようにしていた医者たち、集会で「犬どもには犬の死を!」と叫んでいた人がいたとき沈黙していた人、殺したり爆破したりした人には確かに罪があるけど、工場で爆弾や爆薬を作っていた人、軍服を縫っている人、兵士に射撃を教え、表彰該当者として推薦している人、彼らには本当に罪はあるのだろうか?<sup>27</sup>

長らく感情の深層で問われ続けていたものが、堰を切ったように噴出したこの証言は、暴力装置としてのソヴィエトのシステムがいかに日常に組み込まれていたかを体感させる。人びとの記憶のなかではソヴィエ

ト・システムの始源にスターリンのあることも、示唆されている。証言のテクスチャーが、意識の重層構造を複雑なままに外化させることを可能にしている。

興味深いのは、まだ決しかねている証言者たちに先んじて、アレクシエーヴィチは被害者でもあったが加害者でもあったと、言い換えれば自身が共犯者であったという認識を表明していることである。その前の五作からすると、認識は大きく変わっているように見える。この変化は、証言を吟味する過程で起こったものと推測できる。アレクシエーヴィチ自身の歴史解釈そのものが表明されるような機会はほとんどないことを考えると、この表明は重要である。

### Ⅲ-4. 8月クーデター

内部に矛盾を抱えてはいるものの、牢固な体制だと思われていたソ連邦がもろくも崩壊したのは、1991年12月にゴルバチョフ大統領が辞任した時点である。と一般に受け取られている。しかし、この時点についての言及は一度も登場しない。むしろ反復して想起されているのは、同じ1991年の8月クーデターである。実際、ソヴィエト人の意識の中で本当の意味で新世界が到来したと感じられていたのは、この三日間で終わった無血革命かもしれない。

この出来事は、ペレストロイカの進展とともにソ連邦と社会主義の維持が難しくなりつつあった情勢のなか、ゴルバチョフ大統領が突然休暇先のクリミヤのフォロスで軟禁された事件である。モスクワではヤナーエフ副大統領が大統領代行となり、国家非常事態委員会が戦車を投入して戒厳令を敷き、連邦維持路線を強行しようとした。しかし、エリツィンらはホワイトハウスと呼ばれるロシア最高会議ビルを拠点として強く抵抗し、モスクワ市民も街頭に出て戦車を妨害した。その後クーデター派が腰砕けとなって事件は終息し、他方でゴルバチョフの求心力も低下し、体制そのものの崩壊へとつながった。

この事象についての証言を取り出してみよう。

1991年国家非常事態委員会のクーデターに対抗し、エリツインらがロシア最高会議ビルホワイトハウスに立てこもった。窓の下を見ると本物の戦車がいた。テレビはどの局もバレエ「白鳥の湖」を流していた。戦車の装甲板の上にいたのは少年兵で、おばさんたちからブリヌイなどをもらっていた。わたしたちが守っていたのは資本主義だと言われているが、違う、守ろうとしたのは社会主義、なにかほかの、ソヴィエト的でない社会主義。わたしはそれを守り切ったと思っていた。三日後に戦車は善良な戦車となってモスクワから出ていった。勝利よ！<sup>28</sup>

これは市民が当日に対し与えていた状況説明のもっとも一般的なものであろう。この証言者は8月クーデターを祝祭として終わったと認識している。10万人が街頭に出て抗議したと言われるが、一方、その外部では「革命は民衆のための芝居。誰もが無関心で、終わるのをじっと待っていた」<sup>29</sup>という状況は、政治史やジャーナリスティックなニュースからは乖離した真相を告げている。それは1917年の革命が、冬宮前で局所的に行われていて、よそではいつも通り舞踏会が開かれていたこととリンクする。

クーデターの三日間は世界を震撼させたけど、わたしたちを震撼させはしなかった。2000人が集会に参加しているのこりの人は通りを過ぎながらバカを見るような眼で彼らを眺めていた。わが国ではいつも大酒を飲むけれど、あの時はとくに飲んでた。社会の動きが一瞬止まった。これから資本主義になるのか？よい社会主義になるのか？その後図書館や劇場から人が消えた。代わりが市場や民営の商店。人びとはまったくの赤貧ですべてを学ばなくてはいけなかった。お金はペレストロイカと共にガイダールと共にやってきて、自由の同義語になった。台所の夜更かしは終わって、出稼ぎや副業がはじまり、強くて攻撃的な人はビジネスをやっていた。こうして国内戦を逃れるこ

とができた。みんなが美しく生きたいと思っていた。糖蜜菓子が全員にいきわたらなかったのはまた別の話<sup>30</sup>。

この証言者にとってもクーデターは祝祭であった。崩壊後、エリツイン政権の下で資本主義経済への移行が難航し、実質的に経済は破綻したという状況も、本来の歴史書であれば数ページにわたる記述が必要なところを、証言は数行のうちに結末に飛んでいる。そして、「糖蜜菓子が全員にいきわたらなかったのはまた別の話」というフレーズは、同じこの時に国家の資産が国の上層部の人間たちによって分割され横領され、新興財閥（オリガルヒ）なるものが登場し、一握りの金持ちと多くの貧乏人という西側のネオリベリズムの構図の侵入はこの時からであることを一言で言い表しているのである。

ロシアを見る際に、歴史であれば特にその記述は都市部に偏ることが多いが、アレクシエーヴィチは意識的に旧ソ連全土を視野に入れようとしている。

クーデターのことはヴォロネジ州で知った。ロシアは偉大だと絶叫しているが、モスクワから50キロも離れてみるといいんだよ。飲んだくれて毎日がお祭り騒ぎの暮らしがどんなものか。どの家もだれか刑務所、まじめに働く者は憎まれる。クーデターのことは村じゃだれもピリピリしなかった。どちらかというと非常事態委員会に賛成が多い。全員が偉大な国家を支持していた。祖父は「かつてわしらの暮らしは豚以下だった、その後どんどん悪くなるとる。」田舎の住民は戦場から勲章をつけて戻った。しかし身分証明書は発給されず、街に出してもらえなかった。奴隷の身、囚われの身だ<sup>31</sup>。

ユーモアとアイロニーからなるこの短い証言にはロシアの抱えるあらゆる社会問題が抽出されるが、そのうえで祝祭の感覚さえ漂わせ始めている。数量的には地方や田舎からの証言は少ない。しかし、だからこそ

わずかに挟み込まれた異質なものは意識に引っ掛かりを残す。数の少ないことが逆に特殊性を帯び、インパクトをもたらしている。

次は、歴史の大きな転換点が、内部にいるものにとって劇的な姿をしてやってくるわけではないことを表している。

僕はエリツインを守っていたアホの一人だ。ホワイトハウス前で人びとが死ぬ覚悟でいたのは自由のためであって、資本主義のためじゃなかった。ぼくらを広場に呼び寄せた連中はいま西側にずらかって社会主義をほろくそに言っている。今、ロシアは西側のゴミ捨て場、原料を提供する役割。ぼくはそもそも社会主義に満足していた、貧富の差がなく、老人も年金で生きていけた。少なくともソ連の教育では自分のことだけでなく他人のことを考えることを教わった<sup>32</sup>。

エリツイン時代の疲弊したロシアで、ソ連時代を懐かしむノスタルジーの一類型とそれが照り返して見える反語的な現在状況が極限まで簡潔に描かれている。

91年ですか、あの頃私たちはすてきな人間だった。あの自由な精神、それを全員が感じていた。それを失うという恐怖。ゴルバチョフは偉大な人物よ、閥門をつぎつぎにあけたわ。…共産主義って禁酒法みたいなものよ。アイデアは素晴らしいんだけど、機能していない。高潔な人はいたけど、あんなに血が流された。……人々はいやというほど苦しんだわ。なんでもわんさとある、自分を甘やかしたい、……クーデターのことは思い出されなくなっている、気が引け始めた、勝利感はない。なぜならソ連国家が消えてなくなるなんて望んでなかった。…ロシアの暮らし、それは軽い読み物よ。でも私はここで暮らしたい、ソ連人といっしょに。そしてソ連映画を見たいの。ウソで注文で撮られた映画でもいいの。……<sup>33</sup>

このいくつかの8月クーデターの証言から、特に最後の「ソ連国家が消えてなくなるなんて望んでいなかった」というくだりから、スターリン没後以降の後期社会主義の時代は、意外にも人びとによって肯定的に受け入れられていたかもしれないことが読み取れるのである。カーテンのこちら側では、ソ連の人びとは相も変わらず物不足と国家の抑圧に苦しみ灰色の生活を送っているという固定観念が抱かれていただろうから、ナイーヴにその言葉を受け入れるのが難しい向きもあるかもしれない。しかし、ユルチャークの最新の研究<sup>34</sup>によると、ソ連型社会主義の枠内で思いもかけないほど充実した生活が送られていたことが分析されている。レーニン、党、共産主義というソ連イデオロギーとしての権威的言語はある威力をもって人びとの精神のうちで内面化されていた。そのイデオロギーに抵触することなく社会システムが要求するルーティーン的行為をこなして体制の維持を図るのであれば、国家はそれ以上人びとの生活に介入することはなかった。社会主義思想の平等の理念は人々に重要性を認識されてもおり、人びとは形骸化した、しかし安定の源でもあった社会システムに少しばかり奉仕した後は、自分の本当の生活空間で、充実し、上昇志向を持った、積極的な生を営んでいたのである。そこには、欠乏と不足を補うべく結ばれたソ連に特殊な互酬関係や、共同体の隣人との間に血よりも濃い絆、つながりが生み出されていたのである。ユルチャークは、この状況をシステムの脱領土化と呼んだが、国家のイデオロギー的な言説空間とは位相を異にする、政治と切りはなした生き生きとした生を営む空間を切り開いていたのである。崩壊後これらはあっという間に消滅してしまった。証言のなかにはこの空間に対するノスタルジアが表出されているのである。反省的思考がなされれば、これらのノスタルジーは未来を築く際の青写真となるユートピア像を掬い上げる可能性をもつものである。

### Ⅲ－5. 証言の言葉からなぜ像を結ぶことができるのか

冒頭の「共犯者の覚え書」を一例として取り上げる

と、「はぎとれないほどに思想を自分の中に入れてしまった赤い人々」の原点の時代が数行で再構成される。

数百万人がつい最近まで命をおとしていたことをわたしたちがおぼえているとしたら、人のいのちの価値はどれほどなのだろうか。わたしたちは憎しみと偏見に満ちている。みながあそこ、収容所と恐ろしい戦争があったところの生まれ。農業集団化、富農解体が行われ、民族が強制移住させられたところの<sup>35</sup>。

数百万人が命をおとした過去の出来事としてここから取り出せるのは、「収容所」、「恐ろしい戦争」、「農業集団化」、「富農解体」、「民族の強制移住」という最小限のインデックスだけである。外部にいるものは、それらを恐怖政治、個人崇拜、全体主義として後から意味づけ名指すことで理解するしかない。筋道の通った、だが歴史学の因果律に閉じ込められた断片的な出来事理解である。歴史学の歴史では、抽出された出来事と出来事の間は空虚である。しかし、語りに埋め込まれた記憶の言葉からは、スターリンの絡みつくあらゆる事象を一気に手繰り寄せて、しかも包括的で連続したソヴィエト社会主義の前半の時代を想起させる。いずれの出来事もいわれなき非業の最後を遂げたものが数百万人単位にのぼると言われ、スターリンの大粛清がある試算によると700万人を超えホロコーストをしのぐ勢いであることや、社会主義のあらゆる理念をかなぐり捨ててナショナリズムで国民を動員した大祖国戦争の人的損失（逃亡者も含む）は2,600万人から2,700万人であったという比類なく残酷な事実<sup>36</sup>については、すでに「大文字の歴史」を参照して詳細な知識が獲得されている。しかし、この引用のくだりを読んだとき、それらが、ソヴィエト前期を分析する際の理知的なタームなどではなく、不条理な出来事が本当に人びとの上に降りかかったのだということを初めて戦慄しつつ感得する契機となるのである。

しかし、なぜ、証言の言葉であれば、歴史学の叙述

では空虚にならざるを得ない部分を充填することができ、連続した様態、包括的な歴史として想起させることが可能になるのだろうか。アルヴァックスの理論<sup>37</sup>がそれに応答できると思われる。それによると、歴史家は特に差異点に対して関心を抱き、類似点を抽象するが、類似点なしには記憶はあり得ず、我々が事実を思い出すのは、事実が同一意識に帰属するという共通点を持つためだとされている<sup>38</sup>。「集団の記憶の中で最も大きい位置を占めるのは、その集団を根底から変容することなく過ぎ去った時間である」<sup>39</sup>。大きな出来事が共同体を変えても、共同体はじきに平準化していき、構成員にとって変容後の世界が日常となるからである。つまり空隙を埋めるのは、繰り返された類似した日常を共有することで担保された集合的記憶なのである。歴史学の歴史叙述は、この方法を持たないであろう。

像を結ぶメカニズムについて、文学の観点からも見てみる。

明らかなことだが、言葉は対象のすべてを語ることはできない。まったく言語化できないことさえある。しかし、ストレートに語る言葉では伝えきれないものがあるとき、人間には喩法という修辞が与えられている。隠喩、換喩、提喩、アイロニーの四つの詩的喩法である。喩法はこの順番で、抽象観念を介する度合いが高まり、同時に複雑さや屈折ぶりも増していく<sup>40</sup>とされる。

例えば、前出の『セカンドハンド』からの引用の五つの言葉は、部分で全体を表す「換喩」の用法だと言える。もし、これらの語が単体であったならば、名づける時に付与された意味を解説することができるだけの歴史用語にとどまらざるを得ない。しかし、限られた情報しか提供できない「収容所」、「恐ろしい戦争」、「農業集団化」、「富農解体」、「民族の強制移住」といった言葉が、証言者の語りという文脈の中に配置されると、それらが実際に現実的力を持って人々に影響を及ぼしていたスターリンの全体主義最盛期をも同時に思い起こさせるのである。語りが現実を部分的にしか表象できないよう運命づけられていることは、むしろそ



の向こうに語りえなかった広大な後背地が控えていること想起させてしまう。「言葉の力」と言われるものの一つであろう。「言葉の力」の存在を立証するための依拠すべき根拠は見出しにくい、文学が具体的な事象を描きだして、そこにはないものをアイロニカルに現出させることは経験的に知られていることである。

本書は、ほかの証言文学と比べても収められている証言の数はかなり多いと思われるのだが、目線を変えると、現在のロシア連邦だけでも1億4,500万人ほどの人口を抱えているのに、旧ソ連圏の人びとの「感情の歴史」を460ほどの証言で構築するのは、無理があるのではないかという疑問が出てくるかもしれない。しかし、集合的記憶と「言葉の力」がそのことにも答えることができるだろう。

アルヴァックスの理論によると、「人間の精神は記憶の中においても社会から遠ざかっているのではないのであり、だから個人の記憶も、集合的記憶の枠によって与えられている」のである。極言すれば、一人でもその共同体の記憶を担うことができるということになる。また、一つの証言が出来事のごく一端しか語れないとしても、その後ろに意味内容が多層的で複雑な領野が広がっていることを想起させるという、言葉には特別の力があることも、わずかな証言が考えられないほどの広い範囲をカバーする可能性を持つことの説明になる。

#### Ⅳ. 「至高性」について

これまで、著者が取材を通して図らずも見出してきたこと、つまり執筆前には予期されなかったが執筆後に彼女が新たに獲得した内容を整理して説明しようと試みた。ここでは、読み手が新たに獲得する「至高性」という特性について考えてみよう。

「至高性」の概念を提示したのはジョルジュ・バタイユである。バタイユの未完の著書『至高性』<sup>4)</sup>について、その内容をかいつまんで語ることは困難であるが、訳者の一人湯浅博雄のあとがきを参照しながら、

つぎのように整理してみる。

バタイユは、ヘーゲル、そしてニーチェの思想に没入する中で、人間がその深奥に本性的に宿しているものの存ことを知り、彼らの思考を批判的に推し進めてその存在に「至高性」という名前を付与して概念化することを試みた。至高性とは、通常、あるいは生涯にわたって、意識されることのないものであるが、内奥で躍動する生、世界内の生きとし生けるものすべてに宿る精霊のようなもの、究極の生きる目的としての自己自身、などがその近似値としてかろうじて伝えられるものである。湯浅は、けっしてうまく補足できないとしながら、「しっかりとまとまった自分自身としての主体性の骨組みが不意に脱臼し、崩れる瞬間に、思いもよらぬかたちで出現する深い主観性」<sup>42)</sup>とも言い換えている。至高性は、絶対に不可能と思われることが起こるという、奇跡的と換言することも可能なものである。現れるのは瞬間で、それはすぐに「なんでもないもの」に解消されてしまう。望ましいもの、いとわしいものを問わずあらゆる形態を取りうる。例えば、近い人の死は、至高性として立ち現れる。残されたものにとって自分と共に永遠にいたいと思込んでいたその人がいなくなると状況はあり得ないこと、不可能なことだからである。

至高性は、現在が光輝にみちた生であることを希求するもので、近代の資本主義における未来を見据えた有用性に基づく事物や行為、なかなずくその帰結としての蓄積の対極にある。しかし、現実には多くの人間は生きていくために有用性の中に身をひたすしかなく、至高性の立ち現れは望むべくもない。そこで労働をせずただ蕩尽するだけの有用性に全くとらわれない王といった存在（あるいは神）に、代わりに至高性の立ち現れを託すのである。それは、人間が本性的に至高性を内在させ、その立ち現れを望む存在だからである。王政といった統治形態が単に個人の支配欲や金銭欲などのみに還元できるものではなく、むしろ民衆がその体制を無意識のうちにも至高性の観点から支持しているとみることができるのである。だが、本来的には、それにもまして個々の人間は、秘かに、至高性

が自身に立ち上がることを、他を凌駕するものとして光りある生のなかに自身を置くことを希求する存在なのである。

至高性という、形而上学を越えいでたところにあるものを感知する者とし、ない者という二つのカテゴリーの存在を想定すると、アレクシエーヴィチは、無論、至高性の肌理を知る側の作家であろう。実際、一作目の『戦争は女の顔をしていない』から、アレクシエーヴィチが注視し、対峙してきたのはひとりの人間なのである。社会主義社会の実際を知ろうとして大勢の人に会い、結果的に集合的記憶を取り出したとしても、彼女が出会おうとしたのは取り換えのきかない個々の人間なのである。「人間というこの小さな空間に……ひとりの人間に……わたしはいつもひかれている。実際に、すべてのことが起きているのは、そのなかなのだから。」<sup>43</sup>という心持で証言者に会えば、「人間というものに驚かされている……」<sup>44</sup>として、証言者と証言の中に至高性の立ちのぼる瞬間に立ちあってきたのである。至高性の立ち現れる数少ない明確な要件は、ありえない、そうなることは不可能だ、起こったとしたらそれは奇跡だ、という状況が生み出されることである。「驚かされている」とはまさにこの状況なのである。

一方、それと共に読み手の方も、アレクシエーヴィチ自身の中に至高性のあらわれるのを見ることもある。

1922年から共産党員のワシーリー・ペトローヴィチは、共産党員であることがアイデンティティであり、祖国にすべてを捧げていた。しかし、大粛清の時、逮捕投獄され、名誉回復のため大祖国戦争に出征した。のち剥奪されていた党員証が戻されたときは、同時に名誉を回復しないまま妻が牢獄で死んだことを知らされても、幸福感をとめることはできなかった。インタビューの途中で録音機をとめるように要求した後、封印していた話を語り始めた。15歳の時、村に武装食糧徴発隊が「富農どもが隠した穀物」を探しにやってきた。コムソモールで宣誓していたワシーリーは、強い義務感から母の弟であるセミヨンおじさんを密告し、おじさんは森で銃剣でめった切りにされた

姿で見つかった。すべてを察した母は、「息子や、出ておいき！神様がお前を許してくれますように、不幸な息子を」と言って麻袋を持たせて出した。涙を隠しつつも、それでもワシーリーは「共産主義者のままで死にたい！わたしの最後の願いだ」といった。

叔父を密告した話は、伏せてくれと頼まれていたが、彼の死後、アレクシエーヴィチは掲載を決めた。「これらすべては、すでにひとりの人間のものではなく、時代のものである。」というのが理由だった<sup>45</sup>。

ワシーリー・ペトローヴィチは、80を超えても、叔父を密告したことを内面で整合をつけることができないでいたのであるが、悔いても悔い改めることの無いものに許しは訪れることはなく、国家は一人の人間を宙づりにしたままだったのである。彼は、おそらくもはや断罪の対象ではなくなっていたかもしれないが、アレクシエーヴィチはこのことをすべての人の供覧に付さなければならないと考えた。この時、アレクシエーヴィチは自身の中ではあるまじき決定を下していたと思われる。彼女の取材のスタンスは、誠実であることだった。善悪の彼岸を超えいでたところで聴取しなければ、人間がソ連の社会主義をどう生きたかという大きすぎるテーマをとらえることはできなかっただろう。しかし、その禁を破って、アレクシエーヴィチの心の中では、いかにソ連が祝祭的な部分を持っていたとしても、スターリン主義のソ連は厳しく断罪されなければならないのだと確信し、告発したのである。社会が強制する道徳ではなしに、自分の内なる倫理的格率に従って歴史を解釈、判断した。タブーを犯したアレクシエーヴィチの姿に至高性が現れてしまった。作品中で文字にすることを注意深く避けたアレクシエーヴィチ自身の歴史認識が、「共犯者」という言辭を用いた時と同様、決然として披歴されてしまった瞬間でもある。

至高性は、この一つの作品全体にも宿っている。充溢した証言の数々が一か所に集められて、自分の光で相手も自分も照らし出すという、他にも例を知らない、不可能な、奇跡的といってもいい空間が切り開か

れているためである。本書が計り知れない豊かさをたたえていると感じるとき、豊かなとみられるものの正体はこのいくつもの至高性に起因しているのではないだろうか。

## V. おわりに

アレクシエーヴィチの作品は多声的であると評されるが、そのことはドストエフスキーの作品を素材に展開されるバフチンのポリフォニー論を連想させる。それによると、作品というひとつの世界の中に投げられた個々の自己意識は融合するのではなく連関し合い、自己意識が同時に隣り合って存在することで新たな事件が起きる。その事件を通して意識が相互に、あるいは意識の中の意識と対話を始めるが、それは弁証法的に発展するというのではなく、個々の意識のなかでの変容を促すのである。一回性、唯一性の中にある意識が同じ重さをもって共に存在し相互作用しあうことで、その世界の、その時代の様相が読者の前に開かれる<sup>46</sup>、とされている。文学作品の様式や主題の大いなる差異にも関わらず、ドストエフスキーの登場人物たちに起こっていることが、アレクシエーヴィチの証言たちにも起こっていて、同じようなダイナミズムが働いているのではないかという仮説を立ててみることができる。隣り合う証言たちの間では、人間の精神や魂ばかりか、その後景にある政治、経済、文化までもが有機的にネットワークを形成し始めているように見える。証言は呼応し合って、集合的記憶を形成し、ひとつの時代精神をも浮かび上がらせる。アレクシエーヴィチの著作は、共時的世界の表出だけではなく、そこからさらにその時代の人間の感情の歴史を構成しようとする意図を持っていたため、ポリフォニーの多声的な状況にとどまらず、シンフォニーとして総体的な歴史状況の像を結ばせたのである。社会的出来事を深く追究すればするほど、反対にその出来事の中に位置する自分の存在自体に向かっても深い問いかけがなされて、哲学的な意味での反省が始まる。全体像を描き出して出来事を俯瞰することと心や感情を扱い人間の

内奥に沈潜すること、対極にあるように見えるこの二つの営為が同時に存在するということが、他のあらゆる芸術やディシプリンには見られない文学特有の現象であり、文学の本質的な力だと考えられる。アレクシエーヴィチの著作は、この文学の力を用いて歴史哲学へと問いを開いていく。

つまり、『セカンドハンド』という証言文学の「形式」が新たに獲得した「内容」とは、「社会主義を生きた人々の内面の歴史」や「歴史哲学へといざなう開かれた空間」であり、「至高性」である。

本書の最後のエピソードは、強権に抑圧されながらぎりぎりのところで生計を立てる独り暮らしの農家の主婦の話である。老年期を迎えた彼女にとっては社会主義も資本主義も色濃く影を落としてはいるが、また貧困生活の頭上をかすめて過ぎ去っていく何ものかにすぎない。

アレクシエーヴィチにとってはこの農婦のような人々こそが、すでに至高の存在である。

なんともいえずなつかしく（わたし自身も村育ちだ）、うつくしくて、なんともいえないよい顔、顔。そして周囲は何とも言えない屈辱的などん底生活<sup>47</sup>。

ただ農婦の庭に咲く夜目にもあやなライラックの重い花房のみが、タナトスにあらがう生のエロティシズムの輝きを放つ。

……教会には通ってないけど、誰かとちょっと話をする必要がある。ほかのことを話す必要があるの。年はとりたくないもんだとか、年をとるのはまったくいやんなっちゃうよ、とかね。死ぬのは惜しい。あたしのすごいライラック見てくれた？夜中に家からでてみると、輝いてんのよ。立って、しばらくながめてるの。折っておまえさんに花束を作ってあげようか……<sup>48</sup>

エロティシズムとは、愛や生命力にまつわる欲動や

期待感をかきたてるものである。アレクシエーヴィチは「現在のうちに終末を感触し、目の前の併存する諸力の葛藤の層の中に、すでに未来を洞察」<sup>19</sup>せずにはいられない。彼女が果たそうとしたのは、独裁権力に痛めつけられても破壊されつくすことのない民衆のいのち、たましいとの対話である。形而上学を越えいでたところに現象する至高性の追求であるといえるかもしれない。

宗教や文学には世界を変革する力のないことはすでに証明済みであると、半ばシニカルで突き放すように

語りながら、アレクシエーヴィチはおそらく変革の可能性をあきらめてはいない。文学を生の深奥にかかわるものとする作家たちが常にそうであったように、人びとの意識のなかにかすかな痕跡を残そうという割りの合わない戦いを、つまり永遠の負け戦を続けているのである。文学の一人革命とも呼ぶしかないのだが、アレクシエーヴィチの著作は、ネオリベリズムの現代に周縁化され続けている文学の本源的かつ近代的な意義をも再考させずにはおかないだろう。

## 注

- 1 アレクシエーヴィチ, Светлана Александровна, 2013, «ВРЕМЯ СЕКОНД ХЭНД», Москва: Время. (= 2016, 松本妙子訳『セカンドハンドの時代』岩波書店.)
- 2 Крылов, В. Н., «ДОКУМЕНТ ДОЛЖЕН ЖИТЬ ПО ЗАКОНАМ ИСКУССТВА» (ИСТОРИЯ «ДОМАШНЕГО» СОЦИАЛИЗМА В КНИГЕ СВЕТЛАНЫ АЛЕКСИЕВИЧ «ВРЕМЯ СЕКОНД ХЭНД»), ФИЛОЛОГИЯ И КУЛЬТУРА, 2014, No. 3(37).
- 3 <http://belsat.eu/ru/news/tatyana-tolstaya-s-matom-vyskazalas-ob-aleksievich-kak-budet-pi-ts-pobelorusski/>
- 4 野家啓一, 2005, 『物語の哲学』岩波書店。などの議論がある。
- 5 イーグルトン, テリー, 1983, (= 2014, 大橋洋一訳)『文学とは何か(上)』岩波書店, 43.
- 6 *ibid.*, 52.
- 7 *ibid.*, 53.
- 8 *ibid.*, 58.
- 9 佐藤泉, 2018 年, 『一九五〇年代、批評の政治学』中央公論新社, 276.
- 10 アレクシエーヴィチ, スヴェトラーナ, 「負け戦」(沼野恭子訳)『世界 2016 年 3 月号』岩波書店, 48.
- 11 Бахтин, Михаил Михайлович, 1963, «Проблемы поэтики Достоевского», Изд. 2-е, Москва. (= 2011, 望月哲男・鈴木淳一共訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫, 87.)
- 12 プロツキイ, ヨシフ, 1987 (= 1996, 沼野充義訳), 『私人・ノーベル賞受賞講演』群像社, 34-35.
- 13 日高勝之, 2014, 『昭和ノスタルジアとは何か 記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』世界思想社, 49.
- 14 『セカンドハンド』, 2.
- 15 *ibid.*, 6.
- 16 *ibid.*, *ibid.* 86.
- 17 ジョージ・シュタイナー, 1959, 『トルストイかドストエフスキーか』白水社, 11.
- 18 アレクシエーヴィチ, Светлана Александровна, 1984, «У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО», Москва: Время. (= 2016, 三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』, 岩波書店.)
- 19 —, 1985, «ПОСЛЕДНИЕ СВИДЕТЕЛИ», Москва: Время. (= 2000, 三浦みどり訳『ボタン穴から見た戦争』, 群像社.)
- 20 —, 1991, «ЦИНКОВЫЕ МАЛЬЧИКИ», Москва: Время. (= 1995, 三浦みどり訳『アフガン帰還兵の証言』, 日本経済新聞社.)



- 21 —, 1997, «ЧЕРНОБЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА», Москва: Время. (= 1998, 松本妙子訳『チェルノブイリの祈り』, 岩波書店.)
- 22 『戦争は女の顔をしていない』 群像社, 5.
- 23 『セカンドハンド』, 46.
- 24 *ibid.*, 12.
- 25 Алексиевич, Светлана Александровна, 1994, «ЗАЧАРОВАННЫЕ СМЕРТЬЮ», Москва: Слово. (= 2005, 松本妙子訳『死に魅入られた人びと』 群像社.)
- 26 *ibid.*, 5 ~ 14.
- 27 『セカンドハンド』, 457.
- 28 *ibid.*, 24.
- 29 *ibid.*, 25.
- 30 *ibid.*, 28.
- 31 *ibid.*, 87.
- 32 *ibid.*, 102.
- 33 *ibid.*, 104.
- 34 ユルチャーク, アレクセイ, 2005, (= 2017, 半谷史郎訳)『最後のソ連世代 プレジネフからペレストロイカまで』 みすず書房.
- 35 『セカンドハンド』, 2.
- 36 横手慎二, 2016, 『現代ロシア政治入門』 慶應義塾大学出版, ii.
- 37 アルヴァックス, モーリス, 『集合的記憶』 行路社, 52-63.
- 38 *ibid.*, 94.
- 39 *ibid.*, 96.
- 40 ホワイト, ヘイドン, 1973 『メタヒストリー』 作品社, 666.
- 41 バタイユ, ジョルジュ, 1976 『至高性 呪われた部分』 人文書院.
- 42 *ibid.*, 387.
- 43 『セカンドハンド』, 2.
- 44 *ibid.*, 6.
- 45 『セカンドハンド』, 203-230.
- 46 『ドストエフスキーの詩学』.
- 47 『セカンドハンド』, 8.
- 48 *ibid.*, 600.
- 49 『ドストエフスキーの詩学』, 60.